

地域が変わる—— 地域活性化の現場



大津

◎びわ湖大津灯りのまつり実行委員会

市民による手作りの灯りのまつり 歴史と伝統の街、湖都・大津の魅力^{まち}を照らし出す



湖上に映えるツリー型イルミネーション「アクアツリー」

大津市の玄関口、JR大津駅から琵琶湖岸へと広がる中心市街地は、交通の変化や大型店の郊外進出などにより、存在感の低下に悩まされてきた。そんな中、市民有志^{まち}らが街の元気を取り戻そうと立ち上がった。今年もクリスマスまで開催中の「灯りのまつり」で、街の魅力を発信し賑わいの創出に奮闘している。

4つの灯りのエリアを巡り ^{じょうしゆ} 情趣ある街歩きを

JR大津駅から琵琶湖岸の大津港、なぎさ公園に至る大津市中心部の街角は、夕暮れを迎えるときさまざまな意匠を凝らした灯りに彩られ、情趣にあふれた特別な空間に生まれ変わる。「灯りdeおもてなし」をテーマに「びわ湖大津灯りのまつり 2014」が9月中旬から12月25日まで開かれているのだ。

湖上交通の拠点、東海道の宿場町

として発展した大津の町は、かつて「大津百町」と呼ばれるほどの賑わいを誇った。「びわ湖大津灯りのまつり」は、この旧百町を含む中心市街地と大津港周辺地域の賑わいの再生を目的に行われているイベントだ。大津駅前広場と中央大通りからなる「やまてエリア」、大津祭の曳山を出す町内を中心にした「まちなかエリア」、湖岸のなぎさ公園おまつり広場を会場とする「みずべエリア」、なぎさ公園打出の森の「なぎさエリア」の4つのエリア会場を設け

ている。それぞれ「えきまえ光のアプローチ」「まちなか灯りのアート」「みずべのかがり火」「なぎさ光の森」とテーマに応じた特徴的な灯りの演出、そしてマルシェなどの食関連の催しやコンサートなどが行われる。

4エリアの先陣を切って、9月16日から10月12日まで開催された「まちなか灯りのアート」の場合は、大津祭の曳山にちなんだ絵柄をあしらった創作灯りが町家の軒先に飾られた。市民が木と和紙で作った手作りの灯りだ。大津祭に

向けて稽古するお囃子が聞こえる中、昔ながらの町家が残る町内を、やさしい灯りを^{など}辿って歩けば、往時の大津百町にタイムスリップする気分が味わえる。

クリスマス期に賑わいを 有志の試みが風物詩に

「びわ湖大津灯りのまつり」のルーツは2001年、大津青年会議所の若手会員有志が中心になり、市の援助を得て、湖岸で小規模なイルミネーションイベントを開いたことにさかのぼる。今ではクリスマスシーズンの風物詩ともなった、琵琶湖に浮かぶイルミネーション「アクアツリー」もこのときに生まれた産物だ。その後、灯りのまつりは規模と参加者を拡大し、年ごとに新しい試みを取り入れ、名称を何度か変えながら継続されてきた。07年からは、地元市民グループや協力企業、商工会議所などの代表で構成する実行委員会を毎回組織して運営するようになり、08年からは大津市中心市街地活性化基本計画に基づく事業として位置づけられた。

今年の実行委員会の委員長、山本進一氏は、灯りのまつりが始まった当初から中心となり、推進してきた人物だ。「春は桜、秋には紅葉のライトアップ、夏は花火大会があるが、冬の天津を盛り上げるものがなかった。本来は歳末商戦で賑わうこの時期をなんとか華やいだものにしたいと始めた」と振り返る。



手作りの立体オブジェ「とと灯り」



まちなかでの灯りの展示

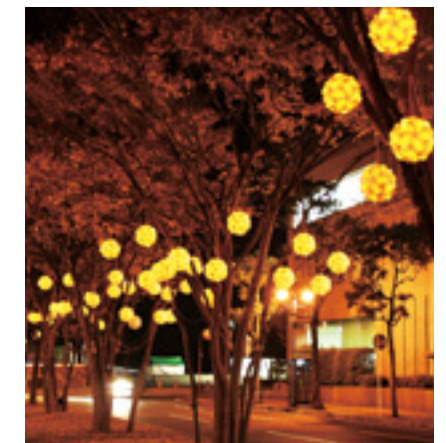
湖上の灯りも電源も手作り 学生たちの若い力も支えに

神戸ルミナリエ、OSAKA光のルネッサンスなど、各地に街を灯りやイルミネーションで飾るイベントはあるが、「大津の灯りのまつり」の大きな特徴は市民が参加する手作りのイベントであることだ。

「スタッフは全員ボランティア。イルミネーションの企画製作から、設置、会期終了までのメンテナンスまで全て自分たちで行う。環境に配慮して、白熱電球をLED電球に徐々に交換し、太陽光パネルを使った電源装置を作製した」と山本委員長は明かす。

街の賑わいをつくりたいという取り組みは共感を呼び、市民の参加・支援の輪は年々自然に広がってきた。例えば、まちなかを彩る魚の形をした灯りの立体オブジェ「とと灯り」は、主婦や飲食

店のおかみさんが参加したワークショップを開き、灯りのアート作りを学んだことで、完成度の高いものができるようになった。成安造形大学、滋賀県立大学などの学生たちの若い力も大きな支え



学生たちがデザインした灯りの果実

になっている。

また、灯りのイベントを行う各地の組織との交流も広がっている。11年には「全国あかりサミットin大津」を開催した。今年も祭り期間中に、関西の灯りのイベント関係者でつくる「関西・光ネットワーク」の会議が予定されている。

大津の街にしかない魅力発信 訪れた人の喜ぶ顔に感動

しかし、ボランティアによる運営ゆえの悩みも少なくない。資金不足や広報の充実だ。

「今年は広報部会を設置してPRに力を入れたが、もっと認知度を高めなくてはいけない。企業などからの協賛も増やしたい。大津祭の本祭前のまちなかの灯りも、クリスマス前の水辺の幻想的な灯りも、一度お越しいただければきっと満足していただけるはず」と話すのは松崎悦子広報部会長。

「琵琶湖とまちなかの伝統と歴史など、大津にしかないものを生かすことで、地域間競争に負けない魅力を発信していきたい。たくさんの来た人に喜んでいただければ、嬉しい。その感動のために、できるかぎりのことをしたい。みんなで楽しみながら取り組むプロセスがあって、地域の人間関係もつくり、ひいては街の活性化につながれるのだと思う」と山本委員長は大津の未来に思いをはせる。